

引津辺の「なのりその花」

あづさゆみ ひきつべ

1) 梓弓 引津辺にある

なのりその花 摘むまでに

あ

逢はざらめやも なのりそ

の花

卷七—1279 人麻呂歌集

（解説）引津のあたりの「なのりその花」よ。その花をつむようになるまでに、（あなたに）逢わずにいきましょうか、必ずお逢いします「なのりその花」よ。（人には言わないで下さい。）

2) 梓弓 引津辺にある なのりその花咲くまでに逢はぬ君かも

卷十一—1930 作者 未詳

（解説）引津の辺の「なのりそ」さえも花を咲かすまで、ずーつと長い間、逢って下さらないあなたですね。

【引津】

・前記二首に詠われている「引津の辺」の『引津』は奈良期に見える地名で日本海の一部で福岡県北西部に広がる海域である玄界灘に突出し、東の博多湾と西の唐津湾を分ける糸島半島（現在、半島の東部は福岡市西区、西部は糸島市に属する。）の南西部の付根、現在の引津湾岸にある福岡県糸島市志摩町の岐志^{きし}周辺と推測されるとの説がある。

『引津』の名の由来は、かつて岐志^{きし}と北方の玄界灘に面する芥屋^{けや}の間が海で、潮が両方へ出入りしたからとも、干潮などの時に外海へ船を引きだしたことから付けられた地名ともいう。

【なのりそ】

・また、前記の万葉集二首に詠われている「なのりそ」は海藻の一種で今の「ほんだわら」の古名で、東北から九州まで広く分布し干潮時の陸地と海の境界線である干潮線付近、及びその下部の岩間に生ずる。古くから食用や肥料、飾り物として用いられるなど生活に縁が深いし、「なのりそ」というのが「名を告げるな」という意になるので、しばしば歌によまれている。本シリーズでも「志賀のなのりそ」の歌を掲載している。

【なのりその花】

・この歌で詠われている「なのりその花」は、今の「ほんだわら」

には花が咲かないが小豆大の楕円形または倒卵形の気胞（うきぶくろ）多く付く、この歌では、この気胞を「なのりその花」と詠んだのであろうといわれる。

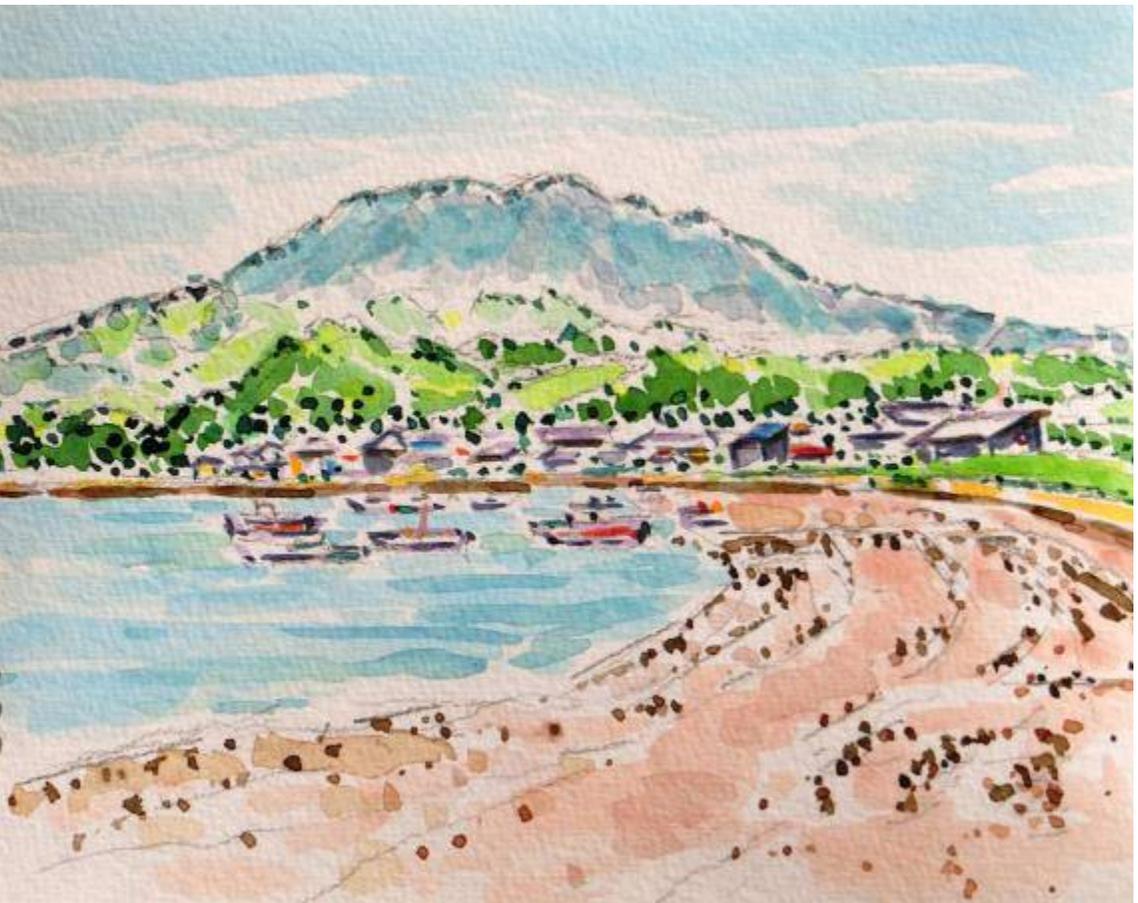
（参考文献）・日本古典文学大系「萬葉集」・伊藤博著「萬葉集釈注」・日本歴史地名大系「福岡県

の地名」「牧野日本植物図鑑」他

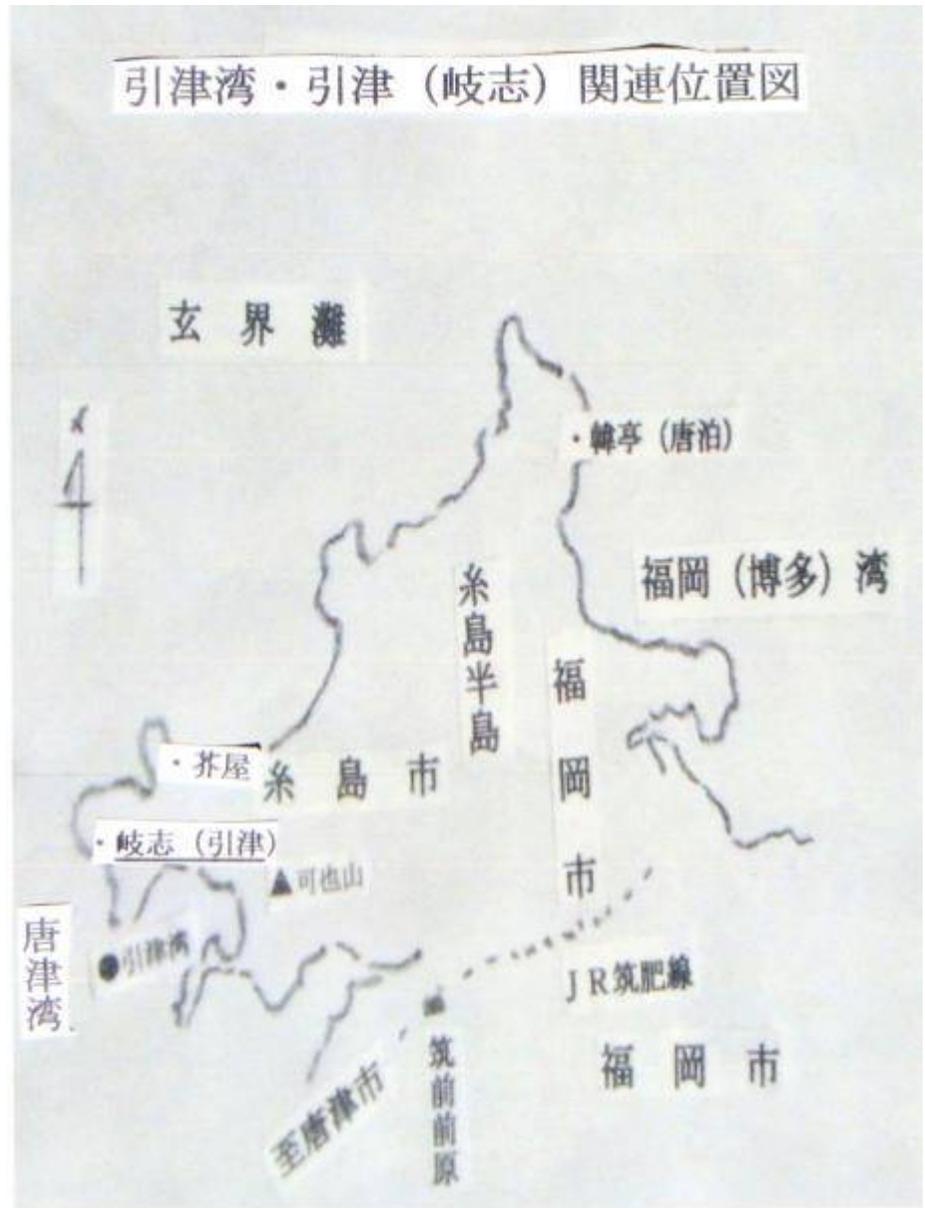
（写生地）・引津湾と正面に山容が富士山に似ているところから

筑紫富士・糸島富士・小富士とも呼ばれる糸島半島のシンボ

ル「加也山（標高三六五メートル）」を描く。（杏花）



引津湾・引津（岐志）関連位置図



【引津（現・糸島市志摩町岐志）・引津湾位置図】